

## 論文審査の結果の要旨

氏名：禰覇 凌也

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：「横断文学者寺山修司の試み～俳句と短歌の統合に向けて～」

審査委員：（主査） 教授 浅 沼 博

（副査） 教授 上 田 薫

講師 中 村 文 昭

本論文は、さまざまな表現ジャンルを駆使した寺山修司を「横断文学」という観点からとらえ、そのルーツに俳句から短歌への「横断」をおき、多義的に分析した意欲作である。周知のように高校生俳人として華々しく活躍した寺山は、その後（1954年）学生歌人として短歌研究新人賞を得る。しかし受賞作の「チエホフ祭」は自作の俳句のみならず、他の著名俳人の作までも発想の契機としたため、歌壇・俳壇から「模倣・剽窃」の謗りをうける。それに対する寺山の反論「ロミイの代辯——短詩型へのエチュード」（以下、「ロミイの代辯」）は、いわば最初の「横断文学」宣言のようなものであった。それを本論では詳細に読み解き、「横断文学」の多様性を探っていく。わけてもその「ロミイの代辯」で措定された「現代の連歌」「単語構成作法」「第三人物の設計」といった三つのテーマに即しながら「横断文学」を少しずつ見極めていくプロセスは、しかるべき迂回を重ねながら、一つ一つ結論を導き出しており、評価に値する。

まず第一章では「現代の連歌」を扱い、そこから派生する「切れ」（句切れも含めて）の問題に注目していく。ほんらい俳句（発句）は俳諧連歌（連句）から発生した史実をもつが、寺山の「現代の連歌」はそれを逆に発想したものであった。俳句から短歌への「横断」はだから、通時的には逆「横断」の側面もあわせ持つわけで、「新ジャンルの復活」などという形容矛盾にみちた野心を寺山は語るほかなかった。しかしそうした屈折に翻弄されることなく、本論では通時的・共時的に「切れ」を考察している。二条良基『筑波問答』（14世紀）から松尾芭蕉の口伝（17世紀）を経て現代の川本皓嗣・仁平勝らの俳論に至るまでを追い、そこに喩的効果を見出していく手順そのものは決して新しいものではない。けれどその「切れ」による喩的効果を、寺山の短歌作品に確認していく作業は、俳句から短歌（現代の連歌）への逆「横断」が単なる古典回帰ではなく、「横断文学」の多様性の一つであることを実証しているとしていいであろう。わけても一首における「切れ」の数の少なさが喩的効果を上げるという考察は、俳句から短歌へという逆「横断」の特質を端的に実証していよう。

次の第二章では「単語構成作法」に言及し、「俳句性、俳句的即物具象性をレトリックとして、茂吉から誓子、草田男へ受けつがれたものをふたたび短歌にかえす」（「ロミイの代辯」）という言説を丁寧に確認していく。思えば歌人・茂吉から俳人・誓子、草田男が受けつがれたものを再び短歌にかえすとは、横断文学者・寺山ならではのフィードバックであり、そこに焦点をあてた本論の妥当性は明確である。

まず茂吉の「実相観入」の写生に対し、寺山の写生を「虚構観入」という観点からみているが、これは第三章で扱う「第三人物の設計」における虚構性の伏線としての機能も果たしていよう。章末では〈茂吉の実相観入を踏まえながら、誓子の写生構成のように二次的操作を加え、草田男が目指したように豊富な具象性と暗示性との両立を試みる〉とまとめている。その過程においては、寺田寅彦の連句モンタージュ論（『映画芸術』1932年）や桑原武夫の第二芸術論（1946年）にふれているというだけではない。秋元不死男の「俳句もの説」（1954年）をひもといたり、中城ふみ子への寺山の評語「新即物性と感情の切点の把握」（『火の継走』1954年）を引いたり、多様な論述がなされている。とりわけ後者へのたびたびの言及は、俳句の即物的具象性を短歌の物語的暗示性へと「横断」させんとする寺山の姿勢をあぶり出しているとしていいであろう。そしてこの具象性と暗示性という両義的な問題は、第一章で確認した「切れ」の問題としても再三確認されている。たとえば茂吉短歌の句切れにおいて指摘されている「二重性の世界」などがそれにあたるが、たんに喩的な効果を認めるのみの既成の「切れ」観にとどまてはいない点において、これを評価したい。

そして第三章では寺山の「私」論の萌芽として「第三人物の設計」を位置づけ、その虚構性を探っていく。

そもそも中城ふみ子の誇張表現自体が、「平明枯淡の身辺詠」を旨とした当時の歌風へのアンチテーゼであったわけだが、「第三人物の設計」の虚構性もまたそのアンチテーゼに立脚したものであった。たんなる身辺詠の「記録」ではなく、「ロミイの代辯」にもあるように「自己の前に生活する自己の理想像をおき、自己をそれに近づけてゆく」虚構性を寺山は求めたわけである。

さらに寺山は嶋岡晨や岡井隆との論争を介して自身の「私」論を深めていくが、本論はそれらを丹念に辿っている。果たして寺山は「短歌における『私』の問題」（1963年）において「一歩先の『私』」という普遍的な「自己の理想像」を提示するにいたる。そしてその「一歩先の『私』」を描くための試みとして「私の拡散と回収」という方法を掲げる。本論では〈短歌連作の一首一首から表れる「私」の断片を読者が回収し総合することで、作者のなかにある「幻の私像」が表れるという手法である〉とまとめているが、その「拡散と回収」という方法を寺山作品に都合よく短絡しているわけでは勿論ない。理想と現実とのギャップ、つまり寺山の志向性と実作との乖離を客観的かつ具体的に分析している。「私の拡散と回収」の実践例として第三歌集『田園に死す』（1965年）をあげ、「私の体験があって尚私を越えるもの」（『血と麦』1962年）を志向した連作ながら、結局は「一歩先の『私』」を描くことができず、短歌との決別に至ったと客観視している。普遍的な「自己の理想像」を提示するには、自己否定を通過し、止揚する必要があるが、「自己肯定の傲岸さを脱けることができない自分の作歌活動」（『歌のわかれ』1983年）に寺山は逢着してしまったのであり、その結果「拡散と回収」は実践されずに終わったと結論づけている。

他方でまた、『田園に死す』における「切れ」の分析をし、〈これまでは一首単位で行われてきた句切れによる暗示や具象性のレトリックを、歌を越えて連作単位、歌集単位で行なうことで一つの虚構の世界を描こうとするものであった〉という側面を指摘している。そしてこの歌集を「日本人の原郷に対する質問の書」と規定した菱川善夫の言説（『自己覚醒の発射装置』2003年）へとリンクしていく。この連作単位、歌集単位での「一つの虚構の世界」を「日本人の原郷に対する質問の書」と見なしていく本論の視点そのものが、先の「拡散と回収」の「回収」に通底するかのようである。こうしたアナロジーをも惹起させる側面を本論は持っているが、それを今後どう展開していくか、課題としてあげておきたい。

第三章では最後に「俳句への志向」という論考がおかれている。『田園に死す』刊行後、短歌と決別しながら、『わが金枝篇』（1973年）、『花粉航海』（1975年）と句集の刊行を試みた寺山を追っている。句集には旧作だけでなく、刊行当時の新作らしき句も散見されることが宗田安正によって実証されている。本論では、それらが総じて短歌に通底する思想性を持っていることを指摘している。すでに第二章において、「もの」が「こと」（＝社会性、思想性）を暗示する短歌の特性が論述されていたが、それがここでも活かされているとしていい。観点を変えれば、短歌との決別後、句集というかたちで思想性が再燃したとも考えられるが、さらに本論では『花粉航海』未収録の最初期の句に着目し、そこに客観写生の持つ非「私」性を見出している。そして最晩年の座談会「歌の伝統とは何か」（1983年）における寺山の「滅私」発言へと紐づけ、新たな可能性を探っている。その座談会で「自分を消していく形」の例として寺山があげた高浜虚子の俳句を解析し、〈「私」を消したがゆえに滲み出る「私」の表現〉つまり「主観と客観の併存」を析出している。

さて最晩年の寺山は短歌や俳句への復帰を仄めかしていたが、残念ながらそれは実現しなかった。本論・最終章ではそのことを逆手にとり、〈未来に託された課題〉という側面から最晩年の寺山にスポットをあてている。死を予感した寺山の言説を検証しつつ、〈全体文学の手法としての滅私の「私」の表現〉について〈文学の閉塞状況を打開する鍵である〉と結論づけている。これは蕉風俳諧を確立した芭蕉が、晩年「かるみ」を提唱したプロセスにも通底する根本問題であり、ここに寺山論における新たな視座を見いだしたことは明らかであろう。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 3年 1月 29日